「かわ」と「まち」をつなぐ鬼怒川サイクリングロード
～地域資源を活用した「かわまちづくり」～

常総市都市建設部　部長　戸塚　　勇
都市計画課　森　　大輔

1．はじめに

常総市は茨城県の南西部に位置し、国が管理する一級河川の鬼怒川と小貝川が市を南北に縦断している。江戸時代から明治時代にかけて、鬼怒川の河岸から利根川を経由し、江戸に向かう船運が最盛期を迎え、鬼怒川流域においては河岸問屋が隆盛を極めた水海道村が宿場町として発展してきた。豊かな水源は肥沃な大地として恩恵をもたらす一方で、鬼怒川・小貝川流域では度重なる水害に見舞われてきた歴史がある。

鬼怒川サイクリングロードは、平成27年関東・東北豪雨災害からの復旧事業として進めてきた鬼怒川緊急対策プロジェクトで整備された堤防天端等を活用したサイクリングロードである。鬼怒川沿川7市町（結城市・下妻市・常総市・守谷市・筑西市・つくばみらい市・八千代町）が参画する鬼怒川・小貝川かわまちづくり推進協議会において方向性を定め、「鬼怒川・小貝川かわまちづくり計画」に基づき、堤防上に整備するサイクリングロードを有効活用し、鬼怒川・小貝川を軸とするサイクリングネットワークを新たに形成していく。今後は周辺地域から人々を呼び込み、水辺の賑わい拠点として「かわ」と「まち」の魅力を繋ぐリバースポットの整備とサイクリングロードを活用した取組みが進む。

写真１　鬼怒川サイクリングロード（常総市区間）

2．鬼怒川緊急対策プロジェクト

平成27年9月、関東地方では線状降水帯と呼ばれる積乱雲が帯状に次々と発生し、鬼怒川上流域の五十里雨量観測所（栃木県日光市）では観測開始以来最多の24時間雨量551mmを記録するなど、各観測所で観測史上最多雨量を記録した。鬼怒川水海道水位観測所においては、計画高水位を超過した8.06mを観測するなど、長時間にわたり降り続いた記録的な大雨の影響で、常総市三坂町の堤防が約200mにわたり決壊、決壊箇所周辺では氾濫流により多くの家屋等が流出する事態となった。

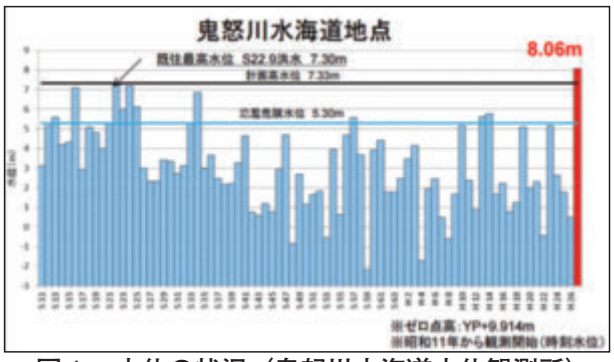

図１　水位の状況（鬼怒川水海道水位観測所）

鬼怒川からの氾濫流は、決壊箇所から約9km下流にあり常総市の災害対策本部が設置されていた市役所本庁舎まで到達し、庁舎浸水及び電源喪失により、災害対策本部としての機能が失われた。市全体の約1/3の面積に相当する約40㎢が浸水する大規模水害となり、宅地や公共施設等の浸水が概ね解消するまでに10日を要し、浸水により約4,300人が救助された。水害からの復旧事業として、鬼怒川下流域（茨城県区間）において災害防止を図るとともに、施設の能力を上回る洪水等による氾濫が発生することを前提とし、社会全体でこれに備える「水防災意識社会」の再構築を目指し、国、茨城県、常総市などの鬼怒川沿川7市町が主体となり、築堤などのハード整備対策に加え、タイムラインの整備など防災ソフト対策が一体となった治水対策「鬼怒川緊急対策プロジェクト」が開始され、令和3年9月15日をもってハード整備対策が完了した。

図２　鬼怒川緊急対策プロジェクト概要

３．鬼怒川・小貝川かわまちづくり

被災地域の振興に寄与するため、鬼怒川堤防天端や高水敷に整備された河川管理用通路をサイクリングロード（河川管理用通路兼用）として活用する「鬼怒川緊急対策プロジェクト＋１（プラスワン）」が進められてきた。さらに鬼怒川沿川７市町が推進主体となり、市町内の商業施設や景観・観光スポット等の地域資源となるタウンスポットとの周遊性を高め、サイクルネットワークの構築を図ることで、サイクリストをまちなかに引き込み、広域での賑わい向上を図ることを目的とした「鬼怒川・小貝川かわまちづくり」の取組みがスタートした。

この取組みを充実させるため、鬼怒川・小貝川を周遊ネットワーク軸として活用し、良好な景観や安全な水辺へのアクセスを有する魅力あふれる川の拠点を「リバースポット」として鬼怒川・小貝川合わせて32箇所（常総市区間は鬼怒川５箇所、小貝川４箇所）位置づけ、国や近隣市町と連携しながら今後整備を行っていく。

図３　リバースポット整備イメージ

４．推進体制

鬼怒川・小貝川の管理用通路をサイクリングロードとして活用し、水辺及びまちなかに賑わいを創出することにより、河川空間と沿川市町のまち空間が融合した良好な空間を形成する推進体制を構築するため、国、茨城県、鬼怒川沿川７市町と鬼怒川・小貝川に並走する形で茨城県西地区を南北に縦断する関東鉄道常総線を運営する鉄道事業者が参画し、「鬼怒川・小貝川かわまちづくり推進協議会」を設立した。協議会では、かわまちづくり計画の策定やサイクリングロードの整備ルール及び維持管理を含めた使用ルールの策定、各市町におけるモデルコースの検討、民間活力の活用検討等を行っている。また、常総市おいては供用開始しているサイクリングロードにおいて、自転車歩行者専用道路として利用者へマナーを周知する実証実験を行い、かわまちづくり推進協議会の場で取組みを共有している。

写真２　マナー周知看板の設置

５．官民連携によるサイクルフェスタ開催

令和元年９月に鬼怒川堤防が常総市区間で概成したお祝いと鬼怒川サイクリングロードの部分供用開始のお披露目を兼ねたオープニングイベント「鬼怒川サイクルフェスタ2019」を河川管理者の国交省と共同で開催した。

写真３　サイクルフェスタ 2019

当日は前日までの台風による強風が残る中、約270名近くの方が市内外から参加していただき、常総市区間の鬼怒川と小貝川を結ぶ約40kmコースと関東鉄道常総線のサイクルトレインを活用した約10kmファミリーコースを設定し、イベント全体の運営を常総市で行い、三坂町の鬼怒川破堤地点付近の堤防上でのリスタートイベントを国交省で運営する形で連携して行った。また、地元建設業者によるサイクルスタンド寄贈や仮設トイレ設置、スポーツウェアメーカー等の民間企業による給水所の設置、鉄道会社によるサイクルトレインに対応したイベント特別列車の運行などが行われ、さらには日本競輪選手会茨城支部の協力により、現役競輪選手が先導していただきイベントを盛り上げることができた。

写真４　サイクルフェスタ　破堤地点セレモニー

６．自転車を活用したまちづくり

関東平野の平坦な地形や鬼怒川・小貝川サイクルネットワークを活かしたまちづくりは常総市の新たな観光スタイルを確立させる可能性がある。鬼怒川は常総市のほぼ中央を南北に流れ、石下・水海道の中心市街地も鬼怒川沿いに面していることから、堤防や高水敷にサイクリングロードが整備されることで、市内広域の地域資源を結びつける新たな自転車幹線が出来ることになる。従来から堤防は学生の通学や工業団地等への通勤に利用されていた区間もあることから、市民のさらなる利活用による利便性も考慮していく必要があり、これらの課題については令和４年３月に策定した「常総市自転車活用推進計画」に基づき、施策を実行していく。本市の自転車利用に関する現状を踏まえて課題を整理し、計画における基本理念として、「誰もが安全・安心・快適に自転車を活用できる社会の実現」を掲げ、以下の施策目標を定めた。１．サイクルツーリズムの推進による地域の活性化、２．自転車交通の役割拡大に向けた快適な自転車通行空間の整備、３．自転車事故のない安全で安心な交通環境の実現と交通安全教育のさらなる推進、４．自転車を活用した市民の健康増進と活力ある健康長寿社会の実現。４つの施策目標を実現させるため、目標値を設定し、自転車活用推進に向けた施策を展開していく。

写真５　整備された鬼怒川サイクリングロード

なお、従来からまちづくりの課題であった中心市街地活性化についても、自転車を活用したアプローチを考えていきたい。これまでのまちづくりは水海道駅や石下駅周辺の市街地を中心として発展してきたが、モータリゼーションの普及により、次第に街中から郊外へ大型店が出店、道路・鉄道インフラの整備が進むにつれ、良質な住環境を求めて、区画整理により新しく整備された近隣自治体へ若年層の流出が目立つ。本市においては65歳以上の老年人口割合が郊外部において増加している現状がある。中心市街地においても商店街としての求心力は乏しく、いかに既存のストックを活用し、まちなかの賑わいを取り戻すかが課題となっている。

2019年11月にナショナルサイクルルートに指定された「つくば霞ヶ浦りんりんロード」が常総市に隣接するつくば市を通っていることから、広域ネットワーク路線としての連携は有効と考えられるほか、鬼怒川と並行して路線を持つ関東鉄道常総線は「サイクルトレイン」の取組みを実施しており、この異なるモビリティによる広域連携も有効と考えられる。自転車を活用することで様々なテーマや季節ごとの「地域サイクルツーリズム」を提案できると考えており、常総市では自転車で地域観光資源を巡る「散走」スタイルをイメージしている。

写真６　関東鉄道常総線のサイクルトレイン

７．今後の展開

サイクルツーリズムは近年、「ビワイチ」「しまなみ海道」などの観光地で長距離を走るスタイルが注目されているが、我々の地域ではもう少し「ユルい」路線で提案しようと考えている。地形が平坦で長距離でも比較的走りやすい特徴を生かして、サイクリング初心者向けのコース設定や家族連れでも安心して巡れるコース等を検討していきたい。

年間最大約100万人の来訪者を見込む圏央道常総IC近辺に2023年３月開業予定の「道の駅常総」をかわまちづくり計画で「タウンスポット」に位置づけ、地域の新たな玄関口として自転車を活用し、道の駅への来訪者を「地域へ回遊」させる仕組みづくりの先行プラクティスとしたいと考えている。

図４　常総市アグリサイエンスバレー事業

これまで「観光振興」という概念に疎い地域であった常総市がサイクリングをツールとして活用することで、これまであまり着目されてこなかった地域資源を有機的に結ぶネットワークづくりや受け皿体制づくりの試行に役立てたい。

また、鬼怒川緊急対策プロジェクトによる堤防整備は茨城県筑西市から守谷市まで約40km、両岸で約80kmの延長であり、従来からサイクリングに活用されている小貝川堤防を加えると100kmを超える延長になるが、堤防をサイクリングロードとして利用するためには沿川自治体の賛同による整備と近隣住民の理解が必要である。鬼怒川サイクリングロードは常総市区間だけでなく、鬼怒川流域での全線開通を目指し、「鬼怒川・小貝川かわまちづくり」事業を進めているところである。

写真７　十一面山に整備されたリバースポット

国においても、豊かな自然などの観光資源や、都市部の貴重なオープンスペースとしての価値を有する河川敷地において、治水上、利水上又は河川環境上の支障が生じないように配慮しつつ、快適でにぎわいのある水辺空間の創出を「河川空間のオープン化」として推進しており、平成23年に河川敷地占用許可準則を改正し、一定の要件を満たす場合には、特例として民間事業者等も営業活動を行えるようになった。常総市においてまだ実績はないが、河川協力団体として指定を受けている「市民の森十一面山保全の会」が鬼怒川若宮戸地区の河川区域内外で環境保全活動や環境教育等を行っており、今後は基盤整備が進む他のリバースポットの活用と絡めて、民間事業者と連携した河川空間のオープン化についても検討していく。

これからも「鬼怒川・小貝川かわまちづくり」に関する情報発信を続け、沿川地域・自治体間で仲間を増やしながら、より魅力的なサイクルネットワークを構築及び河川空間の活用に積極的な企業・団体・地域等と連携・協力し、また、河川流域全体のあらゆる関係者が協働し、流域全体で水害を軽減させる治水対策「流域治水」への転換を図りながら、「川と共に生きる防災先進都市常総」を目指していきたい。

出典

●『平成27年9月関東・東北豪雨』について
国土交通省関東地方整備局下館河川事務所
●『鬼怒川緊急対策プロジェクト』進捗状況等について
国土交通省関東地方整備局下館河川事務所